

発電設備専門技術者 インタビュー ③⑧

むらたに よしたか 村谷 嘉隆 さん（松岡産業株式会社）

新幹線下り列車にて、名古屋駅を間近に車窓から本社ビルを眺めることができる松岡産業株式会社。同社はこれまで東海地区を中心に、自家用発電設備の施工で多くの実績を積んできました。

工事部に属する村谷嘉隆さん（55歳）は名古屋で生まれ育ち、発電設備専門技術者として各地を回り、再び郷里での仕事に奮闘しています。

豊富な業務経験で世間の酸いも甘いも噛み分けている村谷さん。これまでの蓄積から得たエピソードを率直に語って頂きました。

敢えて異業種への転職を決意

村谷さんは神戸のホテル会社勤務を経て、平成8年に海運系の整備会社に転職しました。時にバブル経済の後遺症と阪神大震災の影響が重なり、神戸は不景気のだ真ん中。「いっそ異業種にチャレンジして見ようと思って。となると工業系、機械もんだらうって決心しました」と当時の心境を話します。

とはいえ、ホテルマンの華やかな仕事から一転、発電設備の技術者となり、発電設備やポンプなどの分解整備の業務は油まみれ汗まみれの仕事。工具の名称や使い方を覚えることからのスタートでした。「同僚に『メガネ持ってきて』って言われて、めがねレンチとは知らず右往左往したことを今でも覚え

ています。」

キャリアを積み重ね、主に近畿エリアの施設を中心に、常用・非常用問わず発電設備の分解整備・試運転業務に東奔西走します。また平成14年には自家用発電設備専門技術者資格を取得。それまで現場作業にひた走ってきた村谷さんにとって、発電設備の構造や法令を体系的に学べる貴重な機会であったといいます。「テキストを足掛かりにさらに勉強しなければという気持ちになりました。特に日進月歩の制御関係は今でも日々是勉強です。」

商業施設のトラブル対応は時間との戦い

様々な施設での整備を経験してきた村谷さん。その中でも特に商業施設での作業は常に時間との戦いだったといいます。平成11年、滋賀県の某スーパーに納められた常用発電設備（500kW×2基）。2年目点検での出来事。閉店後の夜間作業でした。燃料噴射弁の分解点検の最中、1基だけ弁が固着し取り外せないことに。時間はかかるものの、止むを得ず皆でシリンダヘッドを下ろし、急ぎヘッドの下側から小突いて弁を抜いた処、バルブシートに若干傷が付いてしまいました。店側からは朝7時までに整備を終了させ、電源を供給することが至上命題。村谷さんらは直ぐさまコンパウンドとタコ棒を持ち出し、



整備後の最終確認を行う村谷さん

傷を無くすため吸排気弁の擦り合わせを行います。

タコ棒を軽く叩く様にしながら少しずつ回転させ、シート面の『当たり』が一様になるまで擦り合わせることの繰り返し。職人技とも言える作業で仕上げ、その後部品を組み直し、翌朝5時に運転再開することができたそうです。

同様にトラブルシューティングでの事例。平成14年、老舗ホテルのガスコージェネ（350kW×2基）。元請会社を通じ、冷却水漏れが発生しているとの連絡がありました。村谷さんは現場に急行し、模擬運転（エアラン）を行った処、1基から水が噴き出てくる事態に。即時に運転を止め原動機を分解し、漏れた経路を辿っていくと、シリンダヘッドのOリング周辺に行き着きました。長丁場になると判断した村谷さんは会社に応援要員を依頼すると共に、ホテル側には復旧に2、3日要することを説明。ホテルの管理者からは、宴会需要も一服しており、空調を停止し電力を抑えろとの返事をもらうことができました。

「実はホテルに聞く前に、ウエイターさんの動きからホテルの稼働状況は大体把握できていました。昔のよしみです」と村谷さんは軽く笑みを浮かべ振り返ります。

駆け付けた同僚と共に、シリンダヘッドをばらし、ピストン・シリンダライナを抜き、全てのOリングを交換。ほとんど寝ずに通し、2日間で復旧しました。「限られた時間での作業では施設管理者との連携プレーが大事。調整力が求められますね」と当時を回想します。

地元の発電設備を整備し続ける

平成20年、村谷さんは松岡産業株式会社に就職し、名古屋に戻ります。28年ぶりの郷里。地の利を活かし、非常用発電設備のメンテナンスを中心に中部各地を飛び回ります。

5年前のこと。愛知県の某ポンプ場の非常用発電設備（150kW×1基）。台風が一両日中に直撃するため、至急点検して欲しいとの依頼を受けます。20年ノーメンテナンスの設備であることを聞いた時、村谷さんは一瞬ためらったものの点検作業を引き受けることとなります。

当然潤滑油は一度も交換されておらず、案の定始動不能でした。また空気始動方式であったため、始動弁、塞止弁、操縦弁を外すと、青錆とカビ等が混じったドロドロのドレンが滴り落ちてくるといった具合。その部品を村谷さんは一個一個、丁寧に清掃し組み直し、原動機は息を吹き返しました。

台風が襲来したのはその翌日。ユーザーからは安

堵と感謝の言葉をいただいたと言います。「災害時には当社は24時間365日対応可能ですが、そうならない様、定期点検が重要なのは言わずもがなですね」と、村谷さんは非常用発電設備における定期保守の必要性を強調します。

また、三重の神社仏閣に置かれた発電設備のメンテナンスにおいても、村谷さんを始めとする専門技術者が大いに活躍。悠久の歴史を有する伊勢の神宮では、自家用発電設備専門技術者資格証の提示を求められ、正しく点検された証しとして、内発協にて交付している自家用発電設備の点検済証の貼付が保守契約の条件になっているとのこと。



自家用発電設備点検済証
(左は一年点検済証、右は半年点検済証)

7割の力で仕事を行い、3割は残す

自家発業界に移られて21年間、一心不乱に勇往邁進してこられた村谷さん。最近、自身の仕事への取り組み方に変化が現れていると言います。「若い頃は100%フル回転で整備にあたっていました。でも今は7割の力でいいんじゃないかと思うようになりました。手を抜くということではなくて、3割の力は沈黙思考するために残し、余力を保つ。現場に急行する前に一呼吸置いて問題を整理する。その方がチームでの仕事がうまくいく場合が多い。」

同社は現在従業員36名の少数精鋭。教育研修にも力を入れ、実務に即した技術の伝承を目的とした「松岡エンジンスクール」を平成25年に独自に開講し、社内外から受講生を受け入れている。最後にご自身の会社における役割を語られた。

「僕らのようなメンテナンス部隊は技術兼営業の立ち位置。緊急対処時の心構えや施主との接し方、また更新計画の情報を得たりすることも見落とせない。広い意味でのサービス業です。建設業とは一見異業種と思っていた業界にも共通項がある。となるとホテルマンで得た経験もきっと活かしているかも知れませんね。」